

高橋教授著「全體の立場」に因みて

拙著批評に答ふ

山内得立

此の書が公にせられて以來既に多くの紹介や批評がそれについてなされ、——それはこの書の我が學界に齎した價高き貢獻に對する喜ばしき反響として見る事ができるであらう——更にその上に蛇足を加へる必要を見ないのであるが、眞摯なる書籍の讀後にその感懷をのべることは恐らく何人にも許されてあることであらうと共に、私にとつてはさらに一つの特殊なる事情が此の書について語ることを殆んど義務づけられたる如く迫るものがあるのである。それはいふまでもなくこの書の卷末に編入せられた拙著「存在の現象形態」に關する著者の批評によつてある。この論文が拙著の刊行と共に特に私のために惠まれたるとき、直に之に對して答ふべきであつたが、實をいへばその論文の内容が、氏も自認せらるゝ如く——それが勿論著者の謙辭であるにせよ——拙著に對する批評といふよりもむしろ著者の自説

の叙述の如き體裁であるやうに思はれたに拘らず、私は未だ教授の獨自なる體系について多く知るところなく、またその批評文のみからしては殆んどそれが拒まれてゐたため、それに對する答へを他日に譲らざるを得なかつた。この意味に於てこの書の出現は私にとつて二重の喜びをもたらす。教授の思想體系が如何にして起り何であつたかを知ることが一であり、それによつて教授が拙著に對してなされたる論評の由つて來るところの根源を明かにし得るであらうことがその二である。私はこの二つの喜びを抱いてこの書を熟讀した。さうして一方にこの喜びの漸次に充されてゆくことを、と共にまたこの豫想の背かれてあることをも感ぜざるを得なかつた。本書に於て著者の最も力をつくされたのは主として二三の哲學者の思想の研究であり、教授の哲學體系の積極的叙述と見らるべき諸篇は極めて簡略であつて十分にその全體を捕捉し易らざる體に残されてゐるからである。尤もコーヘン、フツセル、ヘーゲル等についての研究の中にも必ず著者の鋭き批判を通して獨自の思想體系が瞥見して居り、のみならずむしろ此等の批判的研究の中に却て著者の得意の壇場があるのではないかとさへ思はせるものがあるのであるが、それにも拘らず此等は畢竟するに著者の體系の積極的叙述でないことは明かであり、我々にとつ

でも最も重要と思はるゝ第一「體驗全體の立場」第二「求むる者と求めらるゝ者」第四「發展の全體と發展の終極」第十「他の一つの止揚等の諸篇は著者の常々なる精細性にも拘らず凡て短篇的素描に終つてゐる。勿論此らの諸篇がさうであることはその内容價値を左右するものでなく、却て壓縮せられたる形に於て著者の思想の眞髓が簡略に叙述せられてあると見ることもできるが、しかしそれらの内容が多く先取的に（二二頁）または豫取して（一六頁）述べられてゐる點から見ても著者にとつて凡ては今後の問題として多産にして豊富なる内容が残されてゐると考へても差支へないであらう。此意味に於て私は教授の力強き主張の諸點について多くの其鳴を感じながら、かくの如き根源的主張の一事が具體的問題にあたつて如何にして生産的であるか、如何に構成的であるかを思はざるを得なかつた。

「全體の立場」といふこの書の性質からしてもそれについて語ることはつとめて全面的でなければならぬであらう。しかし私のこゝに志したことは主としてこの書に因んで教授のかつての拙著に對する批評に答へんとすることにあつた。私のこの論文はそれ故に或は極めて一面的であつて、教授の要求せらるゝ如く、個々の論文に即してその思想を精細に考察し且つ批判することの出来ないのを遺憾とする。

さてこの書に於て中心となつてゐるものはいふまでもなく全體なるもの、就中體驗の全體的なるものである。しかしこゝに「全體」とは第一に何を意味するのであるか、序文に於て述べられてゐるやうに、この書の「全體」とは大體に於て絶對的無の立場と所謂有限者の立場との中間に位するところの體系の立場である。教授の最近の思想はこの體系の立場をも超えて深遠なる絶對無に迫らんとするものゝ如くであるが、また一方に於てこの絶對無と有限者との關係をこの中間的なる體系の立場によつて結合せんとせらるゝものの如くでもある。それは、それ故に體系の立場から上方と下方との兩方向に更に探求の歩を進めて行くことは、私に残された二つの課題である〔序文一五頁〕といはれてゐる點からしても知らるゝであらう。體系としての全體の立場は絶對無の立場に對してはなほ相對的な全體の立場たるを免れず、飽くまでも絶對を求めてやまぬ眞摯なる教授の研究は遂に絶對無の堂奥に邁進せしめねば措かぬものがある。しかし有限者と無限者との間の關係如何の問題は當然起り來るべき恐るべき疑問として論文第三の終りにも豫想せられてゐるから、或意味に於て本書の中心をなしてゐる體系の立場は教授にとつて永遠に意味深き全體の立場であるといはねばならぬであらう。この立場を中心として上下の兩方

向に探究をすゝめることは必しもこの概念によつてこの二つの立場を結合する企ではないにせよ、哲學が學問として要求せらるゝ以上體系の立場は或はこの兩者を貫いて動くところの中心思想であるかもしれない。のみならず絶対無の全體はそれが如何に深奥なる立場にあるにせよ、顧みて有限者の全體を無視し得ぬ以上、教授にとつてはむしろこの二つの立場を結合したものが最も包括的なる全體の立場であらねばならぬであらう。従つて絶対無は有限體を超越する立場であるよりもむしろこの兩者を超越し、さうしてそれ故に兩者を結合するところの立場とならねばならぬであらう。この消息は教授が無の思想の發展を論せらるゝときにも既に瞥見してゐる。教授にとつて無は始め、有に限界づけられたる、有の缺如様相と解せられ、次に全く非存在なる單なる意味と解せられ、更にまたコーヘンの根源無と解せられたが、今や最後に體系的全體としての超對立的超自覺的な純一にしてまた完一なる絶対無と解せらるゝに到つた。即ちこゝに於て絶対無は體系全體としての純無として考へられるに到つた。體系の全體は今や絶対無と有限的全體との單なる中間に位する立場ではなく、絶対無が體系的に考へられることによつて、體系はむしろ絶対無をも貫くところの基礎的立場となつたのである。勿論教授にとつて最も根

概的なるものは絶對無であることは疑ひない。體系が絶對無を包むのではなく、絶對無が體系そのものをもつゝむのである。しかしかくの如き純無も有限體に對する限り體系の立場をすてることができぬ。この意味に於て體系の全體の立場はたゞに本書に於て中心思想をなすのみでなく、教授の今後の思想の發展にとつても重要な全體の立場であるといはねばならぬであらう。

しかし教授はこの體系の立場を中心として上下に絶對無と有限體とに對して如何に探究の歩をすゝめらるゝであらうかは、今後の問題に屬することであつて、さしあたり我々の知るべきことは全體なるものとしてはこの三つが考へられてゐるといふことである。さうしてこゝにも明かなのは教授の立場が凡ゆるものに於て「全體的なるもの」を求めてやまぬといふことであらう。有限者については有限的なるものを基礎とする全體の立場といふものが考へられる。絶對無はいふまでもなく全體的なる立場でなければならなかつた。さうして今やこの兩者を結合するものとして(少くともその中間にあるものとして)體系の全體の立場が考へられようとする。教授の見出さるゝものは凡てが全體的なるものである。恰も宗教者が凡ゆる時に到る處に神を見出さうとするやうに。眞摯にしてひたむきな教授のこの

態度に何人と雖も敬虔の念を禁じ得ぬであらう。

しかしかくの如き全體性への追究は學問の論構として何を我々に語るものであらうか。それは何よりも先づ全體的なるものに於て凡てをそこに包括せんとする哲學其物の性格をあらはす。全體的なるものへの追究が即ち哲學であるとすれば教授のとられたる道は典型的なる哲學の大道であるともいへよう。有限體より絶對無へ、さらに之らを中間する體系の全體性へ、さうして何よりも先づ無限的なる絶對無の完一性への歩みは哲學の傳統的なる本道であつことも明かであるであらう。凡てはこの全體的なるものの中にふくまれ、この全體の一面を形づくるものとしてのみ意味をもつてゐる。凡ゆるものはこの全體者によつて基礎づけられ、それに於て根據をもつことによつてのみ存在することができる。體系とはこの意味に於て全體的なるものの別名に外ならなかつた。その支配を脱逸する何物もそこには許され得ない。一舉にして凡てを盡くし、凡てに貫くところにのみ體系が成立つ。それ故に體系の立場は全體の理念であり、無限の超越にあるといはねばならぬ。教授はこの立場を力強く代表して周到なる用意の許に凡ゆる論文に於て之を開示し論證しようとしてとめられるのである。

しかしこの立場が哲學の唯一の道であるか、全體的なるものの追究が即ち哲學であるとしてもそれへの歩みに於て異りたる方途があり得ぬであらうか。我々はこゝに理論的にこの問題に深く立ち入らぬであらう。たゞこの點について次のことが留意せらるべきである。例へば第一哲學として最も體系的に全體的なるものを追究したアリストテレスの哲學に於ても私の見るところによれば二つの異りたる方途が見出される。アリストテレスは存在を——彼れの第一哲學が存在の概念にあつたかそれとも他にあつたかといふことは今は論外におく——規定するため、それ／＼四に區別された二組の仕方をもつてゐる。即ち一方に自體的存在と附帶的存在、眞なる存在と僞なる存在、可能及び現實としての存在、範疇的存在を區別しながらまた他方に、本質、一般、類、及び基礎の四つの概念を存在そのものについて區別してゐる。この二組の規定の仕方が何を意味するかについては多くの問題が残されてゐるであらう。しかし私の見るところでは後者の區別はその規定の仕方からいつても存在そのものについての規定であり、前者は存在の存在の仕方についての規定であるといふことによつて之を區別することができる。存在を本質として考へるか乃至基礎として把握するかは存在そのもの、または存在の本體的なるものの規

定であるが、存在が可能的として現實的として乃至は眞として偽として語られるのは存在の種々なる語られやうについての規定であるといはねばならぬ。アリストテレスによれば存在は種々に語られる、存在が存在するといふことには種々なる意味がある。この意味の存在の種々なる形態を規定することは存在の研究にとつて重要な仕事の一つに屬してゐた。普通に可能及現實態は存在の本質として解せらるゝが、さうでなくして却て上の意味に於て存在の形態についての規定であるといはねばならない。この二組の規定の仕方の孰れがアリストテレスに於てより重要であつたかは別問題として、少くともこの二つの規定の仕方が彼に於ても存在してゐたといふことが我々にとつて大切である。存在はたゞそのものとして、凡てを含む一般として、凡ての根柢に横はるところの基體として規定せらるゝのみでなく、むしろそれにもまして種々なる形態に於て存在する。存在をその形態に於て規定することは却て之を具體的に、現實的に存在せしむる所以のものであるとさへ考へられるであらう。アリストテレスに於て可能及び現實としての存在が優れて存在について論せられた仕方であるのもこの理由からして、あつたと思ふ。

茲に於て我々は次の如くいはねばならぬ。存在を——或は一般に哲學的なるも

のを——規定する方途はたゞ一つに限られてゐない。凡てを全體的に、完一的に規定することは哲學の方法の全體を盡してゐるものとはいへない。我々はこの立場の外に少くとも上に述べられた意味に於て他の一つの立場のあり得ることを知るのである。さうして高橋教授のとられた立場が前者であるとするならば、私のとつたものはまさに後者のそれであつた。教授と私とは既にその出發點に於て別途に出でてゐる。教授の拙著に對する批評が私に多くのものを齎らし、私を啓發するところ尠くなかつたに拘らず、根本に於て相容れないのは主としてこの理由に基くのであらう。私の教授に對する答へも從つてこの根本的相違を明かにすることにつきてゐるとさへ考へられるのである。

一般にいつて私の問題とするところは存在の存在論的解釋であつた。存在は何かのあり方に於て存在するより外に在在するを得ぬといふことが私の根本原理となつてゐる。存在をそれが存在する限りに於て問ふといふことは必しも存在の現象形態を外にして存在自體を全體性に於て問題とすることを意味してはゐなかつた。存在をその一般性に於て問ふことは却てそれをその夫々なる形態に於て追究することではなければならなかつた。存在の純粹なる自體は之らの現象形態と

は別に一元的に、全體的に存在するのではなく、むしろそれらの有限的なる、具體的なる形態に於て把握せらるゝのである。高橋教授にとつてはかゝることは全く許すべからざることであるであらう。氏にとつて最初なるものは存在の自體的なる全體である。それは我々のいふ現象形態とは別に、少くとも明瞭に區別せられて何よりも先づそこに存在する。さうしてそれは全體的なるものであるからして凡ゆる存在の形態をその中に含んでゐなければならなかつた。種々なる現象形態はそれの中に根據をもち、それによつて基礎づけられることによつて存在する。それ故に凡て有限的なるもの、形態的なるものはこの全體の一面であり、それを擧揚するとは全體の抽象であるにすぎない。この全體が生成として發展として考へられるのもそこからして凡てを生産し根柢づけるものとしてののみ意味を有するからである。勿論教授にとつてもこの存在自體は現象形態を離れてどこかに横はるものではないであらう。それがあつたことはむしろこの生産作用、根柢的作用としてののみ存在する限りに於てである。しかしそれにしても教授にとつて最初であり、のみならず常に中心的なるものは全體としての存在自體であり、それがあつたことによつてのみ存在の諸形態はそこに現象するのである。さうして何よりも大切なことは之等

の諸形態は存在自體に比しては單に一面的なる、抽象的なる一つの形態であるにすぎないと考へられる。かゝる見地から教授は私の三形態をも一つのものの三つの側面であると思ふとせられた。例へば判斷について「それはその作用に於て見れば現實的であり、その根源に於て見れば可能であり、その成果に於て見れば必然である」〔四五〇頁〕。さうして作用と根源と成果とは共に一つの全體的なるものの夫々一面でしかないのである。教授はまたかゝる見地からして凡ての問題をこの全體に融合しようと企てられる。「ヘーゲルとヘーゲル主義に於て」大體からいへばリッケルトの他立原理はこの體系の兩端としての形式と内容との關係を靜止的に見たものであり、ヘーゲルの辯證法はこの兩端の間の内部構造を見ないで、たゞこれを反省作用を以て結合したものであり、コーヘンの根源の原理は、それらの間の内部構造を見たものであるが、たゞその一方方向のみ見たものにすぎない〔三七一頁〕と論せられる。さうして教授の独自の立場はこれらの一面的なるものを凡てその中に包含するところの全體的なるものにあるのである。教授の體系は最もコーヘンの哲學に近いものの如くであるが、コーヘンと雖も未だその立場の一面をしか捕へてゐないのである。眞の存在はその究極性からいつてもその全面性から考へても教授の

主張の如きものでなければならぬであらう。しかしこゝに問題となることはかくの如き多くのそれぞれの立場が如何にして夫々成立し得るかといふことである。それらが盡く一面的であつてもそれぞれに一面の眞理を有することだけは明かであらう。これを一面的として互に規定するものは何であるか、それは教授にとつていふまでもなく全體的なるものでなければならぬと答へられるであらう。併し私の問ふところは、これらの各々を内容的に規定するものは何であるかといふのである。それは教授の答へをまつまでもなく或時は作用であり或時は根源であり或時は成果である所以のものでなければならぬ。一つの全體的なるものについて多くの様相を區別せしむるものは之を作用の方面から、根源から、成果から見、ることによつてのみ可能である。さうしてかゝる種々なる見方を可能にするものは勿論氣隨なる主観でなく作用、根源、成果等のそれぞれの形態でなければならぬ。存在については、此等の様相が見出されるのみでなく、それぞれは全體の立場に於てもそれぞれの位置を占めてゐる。さうして存在は此等の様相を外にしては存在することができない。存在は何らかの形態に於てなくしては存在し得ない。このことは存在そのものなくして存在の形態のありえよう筈がないといふ命題——これは教授に

とつて根本命題である——と同様に確實なることである。さうして存在の研究について私のとつた道は實は上の根本命題からしてであつた。

教授にとつては以上の如く作用根源、成果等を單なる様相として見ることは勿論不満であらう。根源は就中存在の一つの様相ではなくして存在の根源である。それは存在の一面ではなく存在を生産するものでなければならぬ。作用は對象の一部でなく對象を、或は指示し、或は認識し、或は構成するものでなければならぬと考へられるであらう。しかしながら存在の根源は存在そのものと全く異つたものであり得ようか。根源無を考へるにしてもそれは正しく根源的なる意味に於て存在でなければならぬ。根源作用、成果等々をその中にふくんで全一なるものでなければ存在そのものとはいへぬ筈であるからである。しかし根源はかくの如く存在の様相であるにしても根源の根源たる所以のものはそれが様相としてあることに於ては、はなく、まさに存在の根源としてある所に横はるといはるゝかもしれない。作用も一つの存在であるが、それが如何なる存在であるかを明かにせねばならぬといはるゝかもしれない。誠にその如くであるであらう。根源は存在の一つの様態であつても存在的なる根據を意味するものでなければならぬ。作用は一つの存在であ

のみでなく時には心理的なる意識として、時には認識論的なる主観として規定せられねばならぬ。しかしこれらの議論に對して我々はいふべきである。それらが或は論理的であり、或は心理的、認識論的であるのはより、特殊なるそれらの規定である。それらがかくの如き規定性に於てある前に先づ存在として規定せられねばならない。事物を存在とし規定することは凡て此等の前に横つてゐる。存在を存在として研究する學問はこの意味に於て最も原始的なる規定を事とするのである。私が存在を存在である限りに於て記述せんとしたこともこの意味に於て最も原始的なる事物の規定であつた。人間が軍人であり商人である前に先づ人間でなければならぬといふ意味に於て現象學的記述は他の種々なる規定の基礎的研究であらうとする。それが存在をその一般性に於て、存在を存在する限りに於て規定するものとして解釋せられるのもこの意味に於て、ある。それ故に存在論はいふまでもなく心理學でもなくまた對象論でも認識論でもあり得ない。私の立場が對象論的であるといはれることにも相當の理由があるであらうが、しかし存在を對象として規定するためには作用的なるものが導入せられねばならぬ對象とは作用に對して意味あることであるからである。しかるに一方に於て私には作用の概念の缺けた

ることを以て非難せられる。私にとつては作用的なるものの缺けたるところにむしろ私の立場が對象論的でないことの理由を認められたく思ふのである。私のいふ存在とは決して作用に對する對象ではなかつた。私の願ふところは存在をかくの如き意識の、作用の、または認識の對象としてではなく、存在をそれ自らに於て、それが存在である限りに於て規定し研究せんとするところにあつた。存在を一般性に於て研究せんとする存在學はそれ故に二つの意味に於て存在についての研究でなければならぬ。一、それは存在を或ものとしてではなく存在を存在として規定しようとする。二、それは存在を或ものに對したものとしてではなく、存在をそれ自らに於て規定せんとする。此點に於て我々の立場は存在を全一として規定せらるゝ教授の立場とも大に接近するところがあるであらう。しかしその間には根本的區別のあることが見逃がされてはならない。

端的にいへば教授にとつては存在そのもののない所に存在の形態または様相のありえよう筈がないといふことが根本命題となつてゐるに反し、私にとつては存在の形態または様相のないところ、存在そのものがあり得よう筈がないといふことが原理となつてゐる。ところが若しも存在とその様相とが緊密なる關係にあるな

らば——このことは恐らく教授も亦快く認容せらるゝところであらうと思ふ、それとも教授はこの命題の裏であるところの、存在のあるところに常に形態があるといふ命題を拒絶せらるゝであらうか、假令形式論理に於てこの事が真でないとしても存在が何らかの形態をもつことは動かすべからざる事實としてそこにあるのである——この二つの命題は同様に真であるといはなければならぬ。若しさうであるとするならば教授のとらるゝ道と私の歩まうとする途とは恰も正反對にありながら志は一つにあると見るを得ぬであらうか。教授は先づ全一なるものをとつて存在の自體を規定しそれによつて存在の諸形態を統一しようと思はれる。さうして哲學の任務はたゞこの統一作用にあると考へられる。これに反して私のとつた途はそれぞれの現象形態に於て、またそれを通して存在そのものを規定しようとするところにあつた。存在そのものがないところに形態があり得ないといふことがその逆よりもより真に見えるのは、思ふにそれが思想の古き形而上學的傳統に屬するからであるにすぎない。デカルトに於てもスピノザに於ても先づ本體としての存在が、次に屬性及び様相としての精神と身體とがこれに従はしめられた。しかしかくの如き存在の順位が唯一の可能的秩序であり得るかどうか。むしろ身體的な

るものが又は精神的なるものが第一に、さうしてそれに於て存在それ自らを規定す他の一つの塗があり得ぬであらうか。

高橋教授に於てはこの全體的なるものは單に存在の順序に於て第一位であるに止まらない。それは凡ゆる意味に於て他の存在を産出し、存在一般の根源とならねばならぬ。そこで教授にとつては根源としての存在は凡ゆる事物の統一の原理となり、哲學の仕事は凡ての存在形態を全體に於て統一するところにあると考へられた。それが教授をして現象形態を區別する場合に實質的觀點の外に一般的な形式的觀點をとらしめ、就中この形式的觀點に重きをおかしめるやうになつた理由であつたであらう。教授はこの觀點からして三つの形態の關係を生成的に説明し、就中三者の生成關係を實存するものと考へ(四四五頁)その分析と記述との試みられんことを願はれる。さうして教授によれば私はこの三つの形態をたゞ並列的に放置してその間の關係を考究することを怠つてゐると非難せられる。こゝにも教授と私との根本的相違を明かにしなければならぬであらう。私にとつてはこの三者の關係は實をいへば並列的でも生成的でもなかつた、相互制約的であるか發展的であるかも主なる問題となつてゐなかつた。可能的形態を第一におき、如何にもそれが他

の二つの形態の根柢であるかのやうに論せられてゐることはあるが、併しそれは教授の意味に於て根源として考へられてゐるのではない。私はたゞそこに存在の形態の順位を規定したまでである。根柢といへば直ちに生産的根源であるかのやうに、又はなければならぬやうに考へることは教授の立場からしてのことであらう。私にとつてはこの意味の根源をそこに考へ、それからして生成的に他の二つの形態を發展せしむること程遠いものはなかつた。この關係を論じなかつたことは私の怠慢の故でなく私の立場が然らしむるところであつたのである。問題はそれが果して存在するか否かである。教授はいはれる。さうして教授はそれを實存すると考へ、またその記述は避くべきものでもない。併しそれが教授の立場からして如何に明白な事實であり如何に必然であつてもそれ故に私の立場に於てさうでなければならぬとはいへまい。この點に於て教授と私との立場の相違は教授も明白せらるゝ如くその頂點に達するであらう。私にとつては教授の指摘せられた如く實質的觀點と形式的觀點とが不自然に交錯せしめられてゐるのでもなければ不用意に混同せられてゐるのでもなく、初めからこの二つの區別はなかつた筈である。私の問題とするところはたゞ存在の種々なる現象形態についてであつ

た。存在は種々なる意味に於て語られる。一つのものが存在するといふことには種々なる意味が區別せられねばならぬであらう。存在の此等の種々なる意味をその語られ方に於て明かにするのが私の任務とするところであつた。存在はこれ以外に、これ以上に、これ以下にその有り方をもつてゐないか、何故に存在はこれだけの仕方に限られ、それだけの意味に於てのみ語られねばならなかつたかは存在と非存在との關係の仕方の根本的な方式によつて決定せられてゐる。我々はたゞこの形態をその種々相に於て記述することに努めた。たとへ一つの形態と他の形態との關係に言及することがあつてもそれは敎授の要求せらるゝ意味に於て根源を求むるのではなく、たゞ形態の存在性に於て順位を規定せんとしたのみである。それを飽くまでも根據づけの立場から見るとは私とは反對に、必然性が最も根源的であるといはれても私にとつてはそれが別の立場に屬するとしか言へぬのである。必然的形態は有矛盾にあるか無矛盾にあるか、或は有矛盾から無矛盾に至る全體にあるか(さうするとこゝに作用的現實形態が這入つて來る)と問はれるが(四五二頁)私からすれば必然的形態はこれらの孰れにもなくしてたゞ矛盾的關係に於てあるとしかいへない。矛盾的關係はこれらの三つの場合を除いて外にはないといはれるなら

ば必然的形態はこれらの三つの場合の孰れの根柢にもあるところの矛盾關係によつて成立すると私は答へよう。なせなら矛盾があるといふことは即ち矛盾するものの兩立を許容しないことであり、その孰れか一つに決定せられたものが必然性をもつのは單に一つの肯定としてゝはなく有矛盾的關係を土臺として初めて可能であるからである。さらにあからさまにいへば我々はこの必然的形態を判断の必然性の根源としようと思してはゐない。そこに私の試みたことは判断必然性が存在の形態としては如何にあらはるゝかを示さうとするのみであつた。かゝる仕事が判断論にとつて何の寄與をも齎さぬ無用の勞作であるといふならば、それは凡て哲學的研究を認識論的に試み、或はそれに限らうとする人々であるにすぎぬといはねばならぬであらう。我々の志すところは存在を認識の對象としてゝもなく作用の客體としてゝもなく、何よりも先づ存在をその存在性に於て問ふことである。存在を存在する限りに於て問ふことも根本的にはこの意味に於て問はるべきことを示してゐるのである。存在の形態として必然性を取扱ふことは教授のいはれる如く之を判断に於て無用に重複することにはならぬことは我々にとつては全體なる存在が先づあつてその一の側面として必然的形態があるのでなく、又この形態

を前者によつて基礎づけようとするのではなく必然的形態が判断そのものの存在
的形相としてそこにあるからしてであるにすぎない。教授も認めらるゝ如く我々
の出發點は單なる對象でなく事態または事實であつた。さうして事態は存在その
ものの一つのあらはれ、またはその模寫であるのではなく、却て存在は事態によつて
存在せしめらるゝのである。之をどこまでも排斥せらるゝのは存在そのものな
い處に現象形態もあり得ないといふ命題に固執せらるゝためであらう。同じ關係
は事態と判断作用との關係についてもいふことができる。判断は單なる事實でな
く決意作用でなければならぬ。それは單なる知的對象でなく意志的決心によると
考へらるべきことは勿論である。しかしこゝにも注意すべきことは事態の成立そ
のものが既に單なる知的事實でないといふことである。判断の決意作用が事實そ
のもののの中にふくまれて一つの存在形態をとつたものが我々のいふ必然的形態で
あるのである。我々はさきに必然的形態が有矛盾でもなく無矛盾でもなく、また前
者から後者への生成でもないといつたのは、決意的判断作用を事態または事實から
區別しないところに基いてゐるのである。いはゞ教授の立場が存在そのものを全
體として、空ろなる純無として却て絶大なる働きを働かせようとせられたと同じや

うに、さうして或意味に於てはそれと反對に、私は作用的存在をむしろ空無として之を事實そのものの中に攝することによつて却て作用の靜的な妙趣を示さうとしたのである。かくいふことは作用の本質を没却することであつて單なる遁辭にすぎぬと一笑せらるゝであらうか。しかし教授も亦作用を一つの存在として見ることに於て認め、しかも動的なるものの上に靜止體を考へようとせられてゐるではないか。我々によれば作用はむしろこの事實的な形態に於て見らるゝより外はないのである。存在を形態に於て見ることは之を作用から離して見ないことを意味してゐる。作用を存在的に見ることはこの意味を外にして何處に求め得られない。しかしこれらの點については拙著に於て十分に、或は不十分にさへ論じ及ぼされてゐない。この方面からしての研究は之を他日に待たねばならぬであらう。

存在は種々に語られる、存在が存在するといふことには種々なる意味がある。我々はこの意味の種々相を通じて、又はそれに於て存在そのものを研究しようとする。しかしこの種々相はたゞ雜然とそこに區別せるゝのみでなくそれぞれ位相に於て規定せられねばならぬ。教授によればこれらをその順位に於て規定することは全體的なるものへの關係なしには不可能であるといはるゝであらう。誠にその如

くである。しかしこれらの種々相に先だつて別に存在そのものの存在すると考へ得ない我々にとつてはこの全體が如何に考へらるゝかといふことに凡てが懸つてゐる。この全體性は形態相互の關係に於てより外に求むることができない。この點までは或は敎授の思想と一致するところがあるであらう。しかしこの關係を生産的、または基礎づけの關係と見ることなしには無意味であると考へられる點に於て我々は一致することができない。可能的形態も何ものかを可能にするのでなければ無能であり、基礎も何らかの事物を基礎づけることなしには多産的でないといはれる(四四七頁)。しかしこれらの言葉からして、我々の明かに知ることは敎授のカント的なる、またはマールブルヒ學派的なる立場に立つてをられるといふことのみである。我々はこの場合根源を求むる立場がそれ自らに忠實である限り、根源の根源を求めてやまざるべきであり、このプロセスは無限に至つて止まらぬことを指摘しようと思はない。または存在の根源はそれと秩序を異にすべきであるから敎授も主張せらるゝごとく、なにかの存在であるよりも空容なる純無であることを軽く見ようとしてはならない。たゞこの場合我々の言ふべきことは根源の思想は多くヒポテーゼの立場に終りがちであるといふことである。コーヘンもプラトンの

イデアをヒポテーゼとして解釋することによつて根源の思想を特徴づけようとした。ところがヒポテーゼは勿論單なる假説や臆説でないにせよ、それはその本性上根源的に疑問的たるを免れない。コーヘンも與へられたるものは問題として與へられたものであることを強説した。問題として與へられたるものは解決せらるべきものであつても解決せられたるものではあり得ない。さうして解決せらるべきものはその問題性からして未だ疑問的なるを免れぬ筈である。勿論根源は單なる始源とは嚴密に區別せらるべきであらう。それは單に最初に與へられたるものでなくして却て凡てを與へるものでなければならぬ。それは解かるべき問題に非ずして問題を解くところの根源であるべきである。しかしそれにしてもまた根源は同時に始源でなければならぬ。その働きに於て如何に根源的であるにせよ必ずそこに有るものでなければならぬ。ヒポテーゼとしてそこに措定せられることもこの理由によつてであらう。ところがヒポテーゼの概念はプラントに於ても明かであるやうにデアアレクタイクの立場に於て最もその本領を發揮する。換言すればこの概念はプラトンの辨證法に於てのみ意義を有するとさへもいはねばならぬであらう。茲には詳論することを得ない理由によつてプラントに於てはこの二つ

の概念は離すべからざる關係に於ておかれてゐた。しかるにコーヘンに於てはたゞヒポテーゼの概念をとつて辨證法的立場はいさぎよく棄却せられてしまつてゐる。私はこの點からしてもコーヘンのヒポテーゼが果してプラトンの的であるかを疑ふのであるが、しかし却てその點にコーヘンのカント的なる新しき立場があることを考ふべきであらう。高橋教授も亦根源の立場をとらるゝがコーヘンと同じく辨證法的ではない。しかし私の見る所では根源の思想は究竟するにヒポテーゼの概念に到達し、さうしてそれは辨證法的なる立場に於てその特色を發揮するといはねばならぬ。かくいふ理由について茲に詳論する邊はないが、次の如き諸點は考へられねばならぬ。根源は單に根柢に横はるもの (*Zugrundliegende*) ではなくして、常に根柢を興へるもの (*Grundlegung*) でなければならぬ。即ち根源の性格はその過程性にある。然るに凡てを過程的に見ることは根源そのものをも過程的に見ることであり、根源はさらにその根源を求めて止み得ない。即ち根源は凡ゆる事物の根源であると共にまたそれ自らはさらにその基礎を求め、さうしてその過程に於いて止るところを知らぬであらう。若しさうでなければどこかに始まるところのヒポケイメノン¹を認めねばならぬ筈であるからである。ヒポケイメンにではなくヒポテー

ジスに凡てを求めようとするときそれは必然にこの二つの相反した命題をその中にふくまねばならぬ。さうしてこの二つの命題をふくむことは即ち辨證法的發展を成立せしむる所以に外ならぬと考へ得ぬであらうか。教授は辨證法に生成と體系とを區別せらるゝが眞の辨證法はむしろこの二つを止揚したものでないであらうか。教授も生成とか發展とかいふ動的形態の外に、むしろその上に全一なる靜止體を想定せられてゐる。この靜止は勿論動體の外にあるものではなく、此等の止揚によつて、——辨證法的ならざる他の一つの止揚によつて達せられたるものであるが、教授の眞意はむしろかゝる動靜二つを打つて一丸としたる全體的なるものにあるであらう。この全一をさらに動的に規定するか靜的に特徴づけるかはむしろ哲學者の性格によるのであるが、最究極者を靜止體に置く點に於て私の立場も教授のそれに、その組織の雄渾さに於て、その構想の深さに於て霄壤の差あるにも拘らず、一脈の相通する點あることを喜び得るかもしれない。

しかし教授にとつて畢竟はこの靜的全體にも止り得ぬ運命がまつはつてゐるであらう。一方に凡てが生成と産出とに於て考へらるゝとき絶對無は有限體を離れて靜止的に存在することができない。それは有限的なるものを産出し、少くとも其

の根據とならねばならぬ。それはそこに横つてゐるものでなく、常に生成し基礎づけるものでなければならぬ。絶對無と有限體との中間にあるものは體系的全體であるが、生成作用は直ちに體系の全體と合致し得るものであらうか。殊に教授の如く凡てを連續的に考へ、そこに如何なる飛躍をも許さぬとき生成を包む體系の全體は生成に對して依然として連續的であり得るであらうか。教授は辯證法的止揚と具體的系による止揚―それが教授のとらるゝ立場である―とを原理的に區別して、前者が發展による止揚であるに對し、後者は發展を包むことによる止揚である(三八九頁)といはれる。さうして體系による止揚は發展をもその中に包むことによつて辯證法的止揚をも止揚するところの高次の止揚でなければならぬと考へられる。しかしこゝに包むといふことは如何なる止揚の仕方であるか、それは恐らく動による止揚でなくして靜に於ての止揚であると考へてよいであらう。さうしてこの場合に於てもそこになほ連續的なる―殊に量的に連續的なる關係が考へ得らるゝであらうか。高次といふことは次元の高さを示してゐる。それは包み包まれる關係に於て最もよくその姿をあらはにするであらう。しかしこの關係は單に直線的なる連續ではあり得ない。一つの次元を越えることにはそこに飛躍がなければなら

ぬ。全體は部分を包むが部分から全體に到るのは單なる量的連續によつて可能であるであらうか。このことは自ら動と静との關係如何の問題につらなるであらう。静的全體は如何にして動的部分に連續することができ得るであらうか。動静をつゝむ全體なるものがあるとしてもさらに問題はこの全體者と動静との關係如何のそれとして殘されるであらう。この問題は逆の方向からしても別抉することができ得る。全體者が部分的なるものを生成するのは前者に於て後者が包まれてゐるかからしてある。しかし教授も最後のアポリアとしてあげられた如く、全體は部分を含まねばならぬ。然るに部分は全體と區別せられねばならぬ。かく全體から區別された部分は如何にして全體のうちに含まれ得るであらうか。部分は無論全體に包まれるけれども、全體から自己を區別する部分の特性、まで全體のうちに含まれるであらうかを問はねばならぬ。この問題に對して教授は最近一つの解決の途を見出し得たかのやうに感せられてゐるさうであるから三九〇頁いづれ之に對する明快なる解答を我々は期して待つべきであるが、とにかく教授にとつては今や動靜二者の關係如何といふことが解き易からざる問題として殘されてゐることはたしかであらう。全體なる靜は動をその中に包むものであるか、靜は動の特性をもその

中に含むことができるか。生成は體系の中に含まれてゐるが、體系は生成の特性をもその中に含み得るであらうか。これらの間に答へて體系と生成とを共にその中にふくむところの或者があるといつてもそれは問題をたゞ一步後方に押しやつたのみであつてその他の何もものでもあり得ぬであらう。

殊に全體はその中に部分をふくむのみならずそれを生成し産出しなければならぬ。體系は生成を包むのみでなくそれを基礎づけ、その根底を與へねばならぬ。一般にいつて空零なる絶對無が如何にして具體的なる有限體を生成し基礎づけ得るか、多くの偉大なる哲學者に對してと同様に高橋教授に對しても最後に投げかけらるべき大なる疑問であるといはねばならぬ。

私のとつたものは凡てこれら無限的なるそれとは正反對の立場に立つてゐる。私は先づ存在そのものをではなく、存在の種々なる仕方を把握しようとなつた。存在そのもののないところにその現象形態もありえよう筈がないといふことが自明的であると共に、何らかの現象形態をもつことなしには存在は存在し得ぬといふことが根本命題となつてゐる。我々のとつた途はむしろ種々なる存在の仕方を通じて、またはそれに於て存在そのものゝ實相を把握しようとするところにあつたので

ある。さうしてこれらの種々なる存在の仕方はたゞ雜然たる存在の意味として區別せられるのではなく、そこに一種の統一を以て全體性につらなつてゐる。この統一性の何であるかを詳述することは今の場合でないがたゞ我々はそれを Analogon の統一として考ふべきことを豫示することに止めてこの蕪雜なる批評文を終りたく思ふ。